

若者の精神保健の動向とその対応(2)

——心理的側面について——

中 藤 淳*

【目的】

本学学生の精神的自覚症状を示すUPIデータ(中藤、2004、2005)や、自殺者数及び「国民生活に関する世論調査」による若者の悩みや不安についてのデータ(中藤、2011、2012)などから、1990年代後半、とりわけ1998～99年頃を分岐点として若者の精神保健上に大きな影響を与える要因が存在することが示唆される。例えば、2018年の「国民生活に関する世論調査」による若者(18～29歳：2016年より調査対象が20歳から18歳に引き下げられた)の悩みや不安は、「感じている」が男性46.8%(前年比0.4%減)、女性59.7%(同5.7%増)、「感じていない」が男性51.9%(0.2%増)、女性38.5%(同6.8%減)である(図1)。

研究対象としている1995～2018年の内、1998～99年頃を分岐点として、それまでの「感じている」の平

均値が男性45.7%、女性45.0%であるのに対し、「感じていない」は男性52.1%、女性52.8%と「感じていない」とする回答が過半数を占めていた。それに対し、1999年以降は、「感じている」が男性56.6%、女性60.5%といずれも6割近くを占めている。しかし、2016年頃よりその傾向にやや鈍化が認められる。2016年の「感じている」は男性52.3%、女性54.9%であるが、2017年は男性47.2%、女性54.0%と、それまで50%以上であった値が2017年の男性でその値を割り、2018年の男性も46.8%である。他方、女性は「感じている」が一貫して50%以上である。

但し、1999～2018年の若者を含む全体(18～70歳以上)の「感じている」は2007年が70.3%と最も高く、平均値は66.5%であり、2018年は63.1%(男性：59.6%、女性：65.9%)である。他方、「感じていな

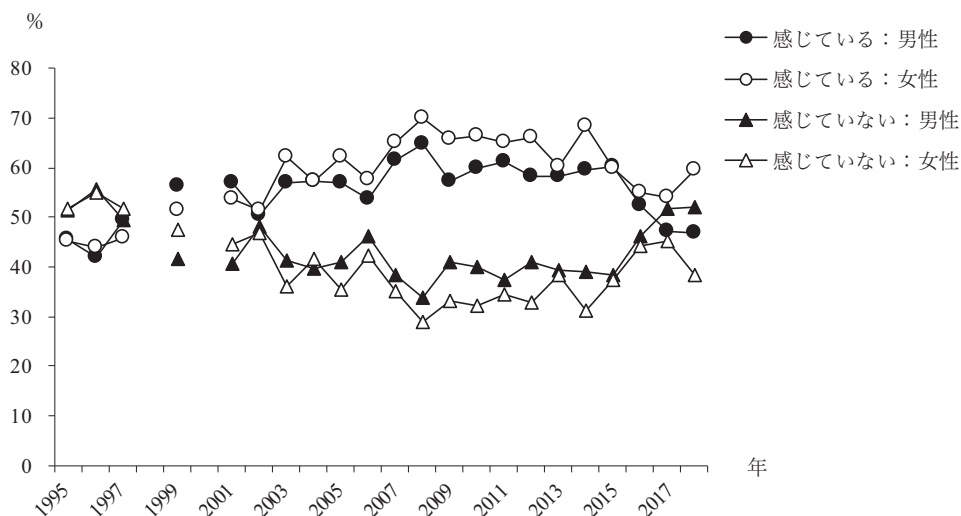


図1 日頃の生活の中で、悩みや不安を感じているか
(内閣府「国民生活に関する世論調査」より作成)

い」は2017年が36.4%（男性：39.0%、女性：34.1%）と最も高く、平均値は32.5%であり、2018年は36.2%（男性：39.7%、女性：33.2%）である。若者と同様、2017年で「感じていない」との回答が高いが、それでも「感じている」が依然として6割以上を占め、特に女性でその割合の高い点に注意すべきである。

筆者は、これまでこうした要因によると思われる現象を取り上げてきた（中藤、2013、2014、2015）。そして、得られたデータを整理して若者の精神保健上に大きな影響を与える要因についての分析・考察を行った（中藤、2016）。

その間、2017年3月に政府の働き方改革実行会議で同一労働同一賃金など非正規雇用の処遇改善などを含む「働き方改革実行計画」が決定された（働き方改革を進めるための改革プラン、2017）。

精神的自覚症状として現れる若者の不安に対しては、例えば学生相談に代表されるような個別的な対応が挙がる。もちろんそうした個別的な対応も必要であるが、こうした政策が施行されれば、これまで本論文で追究してきた精神保健の動向に多大な影響を与えていると推察される「先行きの不透明さや、より良い未来への確信が持ちづらいこと、特に、経済上の変化や社会保障における不安」の低減や、「それらに伴う生活上の変化、例えば、社会的格差や貧富の格差が拡大傾向にある、あるいは、過去に比べて希望が持てない社会」からの転換あるいは脱却が期待される（中藤、2011、2012、2013、2014、2015、2016）、との考えから「働き方改革実行計画」に関連する労働環境について考察・検討を行った（中藤、2017）。こうした労働環境の整備・改善は本論文の研究対象である若者ばかりでなく、老若男女問わず、また、本論文では取り上げなかったが外国人などにも有用であろう。

働き方改革関連法案は、2018年6月に参院本会議で可決・成立し、2020年4月1日から施行される（但し、中小企業におけるパートタイム・有期雇用労働法の適用は、2021年4月1日）。

そして、こうした働き方改革関連法案を見据え、裁判所や企業などに注目すべき動きがあった。

2018年6月に最高裁第二小法廷で、正社員と非正社員の待遇差が、労働契約法が禁じる「不合理な格差」にあたるかが争われた二つの訴訟の判決があった（朝日新聞 2018年6月2日）。裁判長は、一つの訴訟で、正社員に払われる無事故手当など5手当が、同じ職務の契約社員に支払われないのは「不合理」と判

断した。一方、定年後に再雇用された嘱託職員が起こした訴訟では、正社員との待遇差の大半を容認した。

政府が2016年12月に公表した指針案では、「将来の役割や期待が異なる」といった抽象的な理由では、待遇格差を設ける根拠にはならないとの考え方を示している。最高裁の判断は、基本給や賞与、手当など一つ一つの性質や目的を明確にし、それぞれの目的に応じて個別に不合理かどうか判断しており、指針に沿った考え方といえよう。

また、大企業の中にはすでに、働き方改革関連法案の動きを踏まえて正社員と非正社員の手当の格差を見直す動きが出ている。例えば、非正社員が数万人規模で働くNTTグループは、正社員に支給してきた食事補助を廃止し、代わりにフルタイムの契約社員も対象に加え、生活支援を名目とする手当を昨年新設した。さらに2018年5月からは福利厚生制度も、健康管理のメニューを中心に正社員の制度にそろえる（朝日新聞 2018年6月2日）、などである。

しかし、こうした非正社員の待遇を正社員の水準まで引き上げるケースとは逆のケースも出てきた。全会社員の半数近い約20万人の非正社員がいる日本郵政グループは、一部の正社員を対象に2018年10月から住居手当（年間最大32万4千円）を10年かけて廃止すると決めた。その結果、住居手当を受け取れなくなる正社員（転居を伴う転勤の無い「一般職」と呼ばれる人たち）は約5千人に達する。なお、非正社員には転勤が無く住居手当も支給されていない。

さらに、筆者の所属する社会福祉学科の卒業生は県や市の保健所の相談員や病院の医療ソーシャルワーカー、精神保健福祉士として地域の医療現場で活躍している。学科ではそうした卒業生と在校生が「医療福祉研究会」を組織し、資質の向上を図っている。筆者はその事務局を務め、毎年研究会を企画・開催し、地域医療の現状や課題などを討論・検討しているが、女性が多いということもあって、結婚、出産、子育て、あるいは配偶者の転勤などの理由で退職を余儀なくされたと推測されるケースに多く遭遇する。退職を余儀なくされた卒業生には学科がその専門性を活かせる職場を紹介できれば、そうしているが、学科でできることはそれほど多くはない。もう少し広範な、また有効な仕組みや組織があればと感じ、トヨタや金融業界の例を挙げた（中藤、2017）。トヨタが2017年、金融業界が2015年からこうした制度を整えている。

2018年6月には、名古屋鉄道など全国の大手私鉄

11社が家族の転勤や介護などで退職する社員をお互いに社員として受け入れる仕組みを導入した(朝日新聞 2018年6月16日)。配偶者の転勤による引越しや、実家での家族の介護などを想定し、対象者を紹介しよう。職種は制限しない。期限付きの出向も選択肢に入れ、採用するかどうかはその会社次第で、転職を保障するものではない、とのことである。東京急行電鉄では2018年に新卒で入社した総合職のうち女性が初めて半数を超えた。一方、夫が地方に転勤することを理由に女性総合職が退職するケースが相次いでおり、今回の仕組みを提案した。人手不足が深刻になるなか、優秀な人材や即戦力の人材を囲い込む狙いがあるのだろう。

上述のように、政府の政策やそれらを踏まえて裁判所の判断や企業のあり方が変わり、労働環境が整備・改善されることももちろん大切だが、実際に働く人の不安や希望などの意識や意欲などの心理的側面の働きかけ(対応)も重要である。本論文ではこれまで労働環境について取り上げたが、今後は心理的側面への対応について検討を進めていきたい。

なぜなら、労働環境が整備・改善されたとしても、不安や精神的ストレスなどから心の病を発症する人は必ず出てくる。その要因として、遺伝や環境が想定されるが、これまでの知見により、遺伝による関与は若干の可能性に過ぎないことが分かっている。例えば、一卵性双生児は遺伝的には同じ素因をもっているはずだが、2人とも統合失調症を発症するのは約50%とされていて遺伝の影響はあるものの、遺伝だけで決まるわけではない(厚生労働省、みんなのメンタルヘルス)。

すなわち、生来的な問題よりも、誕生後にいかなる発達をたどり、その過程でいかなる人格が形成されるかの方が重要な問題なのである。それは生育する環境や対人関係に影響される部分が大きく、とりわけ幼い頃は、長期にわたり親(またはその代理)の世話を受けなければ生きられない。そのために、親(母)子関係や生育環境は人格形成の重要な鍵を握っている。遺伝によると考えられるような問題点も、実は生まれつきによるものではなく、親と一緒に生活するという環境面からの影響として考えられる部分が決して少なくないのである。

心の病の発病のメカニズムをこのように理解すると、青春やその後の人生において異常な事態を招くか否かは、それ以前の発達過程によって決定づけられ

るといってもよい。また、幼少期において人格のベーシックな部分が確かに形成されていれば、仮にいったん発病などの異常な事態に陥っても、やがては正常に回復し得る可能性があるといえる。

同様の考え方にストレス脆弱性モデル(精神保健福祉用語辞典、2004年)がある。このモデルは生物学的脆弱性をもつ個体に心因としてのストレスが加わり発症あるいは再発するとする説である。この生物学的脆弱性は胎生期に形成され、思春期のストレスが加わり発症するというモデルもあるが、単純すぎるきらいがある。むしろ、「脆弱性自体が生物学的のみに規定されるのではなく、在胎中から思春期までの環境との能動的相互作用により脆弱性が形成される」と考えた方が、これまでの統合失調症の膨大な研究成果を統一的に説明できる。この脆弱性は具体的には、外界の認知の歪みを生じやすくする。これに思春期以降の大きなストレスが加わると、知覚や思考の歪みとして症状形成し、幻覚や妄想あるいは興奮や混迷に至る。とりわけ、統合失調症における知覚や思考の歪みは、外界(他者、社会)の主体的意味において顕著である、とされる。

本論文では、こうした観点から、心理的側面への対応についての追究を試みる。

【方法】

人格形成における乳幼児期の親(母)子関係の重要性を強調するFreudの説は、人格的に障害をもつ成人の生育歴を過去にさかのぼって得られた、いわゆる追跡法に基づくものであった。研究方法としては、乳幼児期に得られた直接的データから出発して、それら対象児の発達を順次たどっていく追跡的研究法の方が優れていることはいうまでもない。しかし、方法論上の困難さから、実際に追跡的研究法で得られたデータはほとんどない、といってよいだろう。ここでは、厳密な意味での追跡的研究法ではないが、それに極めて近いと考えられる資料から検討・考察を行う。

その資料とは、井上靖の著書(1976)と夏苺郁子の論文(2016)である。いずれもいわゆる客観的なデータというよりは、自省報告と捉える方が相応しいが、極めて特異な親(母)子関係や生育環境のもとで育った人物の自己形成史として貴重な資料である。

井上靖(1907年-1991年)は、「しろばんば」「夏草冬濤」「北の海」などの自伝的小説や、「氷壁」「星と祭」「淀どの日記」「額田女王」「蒼き狼」「楼蘭」「敦

煌「天平の薨」などの作品で著名な作家である。また、夏苺郁子(1954年-)は、現在、夫と共にやきつべの径診療所で児童精神科医として活動している。

【結果及び考察】

井上靖について

井上靖は明治40年(1907年)5月6日、北海道の旭川で井上家の長男として生まれた。父隼雄は陸軍の軍医で、母の八重と共に伊豆の湯ヶ島の出身。父の朝鮮従軍により1908年に母と祖父とともに伊豆に帰った。その後、父が朝鮮から帰り、東京と静岡にそれぞれ短い期間ずつ住み、静岡時代に妹が生まれた。妹が生まれて、半年か一年経った頃、靖が5歳のとき、靖は湯ヶ島へ帰り、両親の許を離れて祖母「かの」の手で13歳まで育てられる(以下、井上姓の人物が多いので、井上靖を単に「靖」と示す)。

このかのが「しろばんば」のおぬい婆さんで、医者であった曾祖父潔の妾だった人である。潔が亡くなった後、潔の生前の意向により、かのは八重を養女にして分家し、戸籍上の祖母となるが血縁関係は全く無い。八重の両親、すなわち靖の曾祖母の居る井上本家にはまだ潔の本妻も住んでいたもので、かのは井上家にとっていわば仇敵だった。こうした特殊な家庭環境のもとで靖は育ち、「しろばんば」が生まれたのである。

靖によれば、「この全く血の関係のない祖母に育てられるようになったいきさつについては詳しくは知らない。おそらく当時若かった私の両親は、私の妹が生まれたりして人手が足りなかったもので、何かの時、ほんの一時的なつもりで私を祖母の手に預け、そのままずっとその状態を長く続かせてしまったものだろうと思う。祖母もおそらく愛情が移って私を手離せなくなったであろうし、私の方もまた祖母になついで、両親の許に帰る気持をなくしてしまったのであろう」(井上, 1976年18頁)としている。

靖は、「4歳までの記憶は全くもっていない。幼少時代の思い出は、みな伊豆の小さい土蔵に関連を持っている。5歳から13歳まで土蔵の中で暮したからである」とも述べている。従って、靖の最も幼かった頃の思い出といえるような思い出は、すべて土蔵の生活から始まっているといえよう。

著書によると、靖は母方の実家の人たちや村の人たちから、おかのお婆さんの「人質」もしくは「擒」なってしまった、と評されたようである。伊豆湯ヶ島は、今でこそ観光地として賑わうが、明治時代は天城

山麓の無名の寒村に過ぎなかった。そうした封建思想でがらじがらめになっている田舎の村においておかのお婆さんはよそ者であり、井上家の籍にはいつてはいたが孤立無援の境涯だったといえよう。そのため、靖という擒を頼みにもしなければならず、曾祖父潔の代用品として愛情も注がずにはいられなかったのである。

しかし、靖はおかのお婆さんとの共同生活をその著書の中で繰り返し、「人質であろうと、なかろうと、祖母との生活は充分満足すべきものだったのである」、「私は曾祖父の代用品みたいなもので、手厚く奉仕され、限らない愛情を注がれたのである」、「おかのお婆さんは若い日曾祖父に注いだ愛情を、老いてからその曾孫である私に注いだことになる。私は曾祖父の代用品みたいなもので、手厚く奉仕され、限らない愛情を注がれたのである。意地悪い見方をすれば、彼女は折角自分の懐ろに飛び込んで来た幼い私が、もうどんなことがあっても、自分の手許から抜け出さないように、あらゆる手段を講じて、奉仕と愛情を惜しまなかったということになる。そのいずれにしても、幼い私にとっては同じことであつた」と全面的に肯定している。

彼女との蔵での暮らしぶりは、「しろばんば」の中で綴られ、また、靖の追想でも例えば、「朝の目覚めはひどく静かで安穩であつた。やわらかい光線が小さい窓の障子を通して流れ込んでいる。決して明るくはなかったが、といて暗いわけではなかった。いつまでも床の中に入ったまま、ほの白い光線の入ってくる窓の方に顔を向けている。私は、幼児のこの土蔵の目覚めの安穩さを今でも忘れることができない」(前掲書, 25頁)、「こういう冬の夜、私と祖母は一体いかなる会話を交わしていたのであろうか。私がとりとめないことを言うと、それに対して、その都度、祖母はとりとめない言い方で答えてくれていたのだろう。今思うと、霜焼の手入れをしている冬の夜は、なかなかいい。幼い人質と、その庇護者は、誰にもさまた邪げられることなく、二人だけの生活を持っていたのである」(同上, 60頁)、「寒いときのことで憶えているのは、おかのお婆さんが着物の背に真綿をくっつけてくれたことである。そしてその上に羽織を着たので、真綿は背から落ちることはなかった。……今も微かに真綿を背負った時の、妙に手ごたえのない柔らかい感じを思い出することができる。……祖母の愛情を背中にくっつけていたようなものである。その祖母の愛情は軽く

て、柔らかで、そしてぬくぬくと暖かだったのである」(同上、93～94頁)などと回想している。

このように、土蔵でのおかのお婆さんとの二人だけの生活は暖かくほのぼのとした雰囲気を感じさせるものばかりであるが、土蔵外ではおかのお婆さんの立場ゆえに外敵が多かった。靖は、「子供というものは、大人たちの想像もできない鋭い触覚を振り回している。自分の幼時を振り返ってみると、それがよく分かる。子供がその鋭い感覚を持ったまま成長して行ったら凄いことになるが、よくしたもので、神さまは適当な時期に子供からその素晴らしい武器をとりあげてしまう」(同上、71頁)と、触覚という言葉を用いて土蔵外のやりとりを切り取っている。

そして、「私はおかのお婆さんの手許で幼少時代を過したことによって、多少周囲の人間の気持に対して幼い触角を振り廻すことを訓練されたかと思う。そしてまた、わが儘いっばいに振舞ってはいたが、家庭で育つのと異って、甘えというものはなかったと思う。おかのお婆さんの方も、盲愛と言っていい愛情を注いではいたが、血の繋がりに来るどろどろしたものはなかった筈である。祖母と孫の関係ではなく、世の男女の愛の形のようなものが、私とおかのお婆さんの間には置かれていたのではないかと思う。私は今でも、おかのお婆さんの墓石の前に立つと、祖母の墓に詣でている気持ではなく、遠い昔の愛人の墓の前に立っている気持である。ずいぶん愛されたが、幾らかはこちらも苦労した、そんな感慨である」(同上、188頁)と述べている。

おかのお婆さんは、靖とは全く血縁関係のない人物である。しかし、複雑な事情があったとはいえ、おかのお婆さんの精一杯の愛情と関心(慈しみ)を受けた靖は、人格のベーシックな部分、あるいはエリクソンのいう基本的信頼に当てはまる人格の基礎(基盤)をしっかりと築いたともいえよう。

靖はわが身を振り返り、「私は郷里伊豆で幼少時を7、8年、沼津で中学時代を4年、金沢で高校時代を3年、東京と京都で大学時代を6年、大阪で新聞記者として12年過ごしたわけである。このうち、伊豆と沼津と金沢の三ヵ所は、私にとって何らかの意味で他と取り替えることのできぬ所であった。この3つの一つでも、他の場所に代わっていたら、私は今日の私とは違うのではないかと思う。その意味でも、伊豆も、沼津も、金沢も、私の郷里と言っていい」(同上、245頁)と述べている。伊豆への思いは「しろばんば」

に、沼津へのそれは「夏草冬濤」に、金沢へのそれは「北の海」に生き生きとした、しかも端正な文章で綴られている。

ところで、靖は、自分の性格について、両親とは似ても似つかぬ自分を自分の内に見出すとし、浪費癖と射幸心を挙げている。また、物事に諦めがよく、かなり大きな失敗にもさして神経を使わぬ楽天的なところがあり、これも両親とは全く異なるとしている。但し、靖はこうした面を全面的に否定しているわけではない。そして、その背景におかのお婆さんの存在を挙げている。

靖はおかのお婆さんと暮らす中で、曾祖父潔の愛人である女性が、曾祖父を無条件に褒める褒め方も好きであったし、曾祖父に関係する人も好きになり、なによりおかのお婆さんが、誰がなんと言っても好きであった、と述べている。曾祖父潔は医者としては勉強家であり、相当な腕を持ってはいたが、他方、本妻と妾を同じ狭い村に住ませるといった傍若無人で、浪費家の面をも併せ持っていた。そうした人物のいいところも悪いところも、おかのお婆さんから尊敬すべきものとして教え込まれた、とも追想している。そして、「こうしたことは、少年時代の私の考え方というものを中心に自由な立場に置く役割をしている」(同上、229頁)と振り返っている。

靖は、ものの考え方や、感じ方に何らかの形で影響を与えた人物としてこのおかのお婆さん、祖母、両親、伯父、義父を挙げている。また、「しろばんば」で上級生の暴力に対して敢然と挑みかかっていった同級生を挙げ、その同級生には、いやというほど自分の卑屈さを思い知らされた、としている。

そうした人物以外では、沼津時代の「夏草冬濤」に出てくるいずれも学業には怠惰で、そのくせ文学好きな友だちからの影響にも言及している。靖の学業を放擲し、遊び暮らすという、何ものにも拘束されない自由な少年時代がこうした友だちとのやり取りを介してまさに生き生きと綴られている。この友だちの一人からフィリップの「ビュビュ・ド・モンパルナス」を借りて読み、「私はこの作品を読んで、初めて自分がその中にいる青春というものの意味を考えたり、人生というものについて思いを巡らしたりすることを知ったと思う」(同上、253頁)とその大切さを述べている。

他方、金沢時代の「北の海」では伊豆湯ヶ島や沼津とは異なり、理科の学生であり、柔道部の選手だったため、文学には無縁な生活を送らざるを得なかった。

「中学時代を気候温暖な明るい沼津で過ごした私にとって、金沢の3年の生活は全く違ったものであった。気候も土地がらも異なり、1年の半分は暗鬱な北国の空がひろがっている古い城下町で、私は中学時代とは全く異なった禁欲的な生活を、否応なしに自分に課さなければならなかった」(同上, 200頁)と追想している。しかし、こうした金沢での柔道に明け暮れる生活も靖はやはり「この柔道部生活と、北国の気候は、私という人間に、やはりある意味で決定的なものを与えていると思う。……もちろん、私は北国で生まれ、北国で育った根っからの北国人ではなく、青年時代の一時期に限って、北国で過ごしたにすぎないが、それでも物の考え方や感じ方にはかなり強い影響を受けていると思う」(同上, 201頁)と追想し、また肯定している。

夏苺郁子について

夏苺は、統合失調症の母親を持ち、自身も青年期から精神科薬を服用していた当事者でもある(夏苺, 2011, 2012, 2014)。夏苺が2歳すぎに母親は結核となり隔離病棟に2年半入院したため、その間、父方の伯母宅に預けられて育った。10歳頃、母親の統合失調症の症状が顕著となり、母親は窓もカーテンも閉め切った部屋で、天井まで積み上げた本を読みタバコを吸いながら一日中小説を書く生活となり、食事として煎餅とコーヒーだけを夜中に食べていた。父親は、次第に家に寄り付かなくなったため、5歳から両親が離婚する19歳まで、ほぼ母親と2人きりの極めて閉鎖的な環境下で生育することになる。母親は夏苺に夕食は作ってくれたが、毎日同じおかずが8年間続いた。また、何年も掃除せず万年床にネズミが糞をするような生活で、夏苺はよく感染症にかかり、入院も経験する。母親は次第に攻撃的となり、たまに帰宅した父が母を殴りつけるといった愛憎まじりの修羅場が数年間続いた、とある。

井上靖の土蔵でのおかのお婆さんとの二人だけの生活が暖かくほのぼのとした雰囲気を感じさせるのに対し、夏苺のそれは暗澹としたものを感じさせざるを得ない。夏苺自身も、「母と2人きりで過ごした時期には母の奇妙な言動や自殺未遂、家出、浪費などに振り回された」と回想している。また、靖が、土蔵での生活や、おかのお婆さんやそれらに関連する事柄を繰り返し肯定するのだが、夏苺は母親の死後7年経って、ようやく両親を受け入れられるに至った心境の変化を

語ってはいるが、それはさほど多くはない。

夏苺は、母親の家出などの言動により、友だちと遊びに行く気にもなれず友人はできなかった。それでも中学・高校は通い続けたが、唯一の取り柄だった「勉強ができる」ことが転校を機に他生徒の反感を買い、酷いいじめにあった。両親やいじめた同級生への復讐として、彼らより高い社会的地位につくため必死で勉強して医学部に入学する。しかし、医学部でも友人はできず、一層孤独を深めていった、などと振り返っている。

夏苺本人の見立てでは「児童期～思春期の抑圧された食生活や青年期の孤立感は、一人暮らしを始めた私を拒食症に追い込んだ」とし、さらに「大量飲酒や喫煙、過食・拒食、リストカット、そして既婚男性との恋愛を繰り返すようになった。こうした行為により、「あなたのため」という忠告の裏にある母への偏見や血筋から逃げようとした」(夏苺, 2016年59頁)としている。また、「私の頭の中には、母と過ごした異常な時間が忘れることができないまま残っている。医大生の時、首をつろうと真冬の風呂場で桶に乗り「これさえ蹴れば、楽になれる」と思った時の裸足の足の冷たさ、首に巻いたヒモの感触は今でもありありと肌に残っている」(同上, 61頁)とも回想している。

前者の拒食については、「今は社会的に適応し拒食症は治ったかのように見えるが、私は現在も毎日同じ物を食べている。家族には献立を考え料理を作るが、自分は同じ物しか今でも食べない」、「拒食・過食があったからこそ何とか生き延びてきたのだから、簡単に症状がとれないのは当然だと思う。同じ物を食べ続ける行為は、今でも私の安定には必要なのだと考えている」(同上, 59頁)と自身の現状と拒食のメカニズムについて述べている。

後者の逸脱行動について夏苺は、「私の心をますます荒廃させていった。『復讐は、人の心を救えない』この言葉を私は医学部に入った時と、結婚適齢期の女性になった時の2回思い知らされた。医学部5年時に自殺未遂を起こし母と同じように私も精神科に通院するようになった。精神科薬を服用しながらやっと大学を卒業はしたが、どの科からも入局を断られ、主治医の教授に拾われるようにして精神科医になったが、極めて不安定な精神科医だったと思う」(同上, 60頁)と回想している。

夏苺自身が、「私の頭の中には、母と過ごした異常な時間が忘れることができないまま残っている」とし

ているように、その生育環境は異常と言ってよいだろう。両親との関係、友だちの欠如、孤独感、逸脱行動など、いずれも筆者の想像をはるかに超えるものである。当然のことながら良い意味での想像ではない。

夏莉を救い出したのは、初めてできた親友である在日韓国人の女性であった。この女性は癌のため36歳で亡くなった。そのため、夏莉とは僅か3年間の付き合いでしかなかったが、彼女の夏莉を気遣う言葉は、彼女自身が人種差別の中で這うように生きてきた人だったから、説得力があった、何より彼女は、孤独の辛さを知っていた、と述べている。

「彼女を通して、私は遅まきながら他者との付き合い方やルール、仲間意識、そして倫理観では説明のつかない感情の存在も知った。その一方で、やはり道德規範は守らねばならないことも、彼女の潔い生き方から教えられた。この時が、自分も真摯に生きてみようと思った瞬間だった。彼女がいなければ、私は転落の人生を送っていたと思う」（同上、60頁）と述べている。彼女との出会いを契機にそれまでの自暴自棄の生活から足を洗い、趣味を通して知り合った男性と結婚し、家庭を築くことになる。結婚により、夫や子どもから「善意ある無関心」や「親が子を思う気持ち」を学んだり、家族で動物園や海水浴へ行くことで、自身の子どもの時代の損失を埋め合わせたような気がした、とも述べている。そして、「私のできることを精一杯やって子育てをしてきた。そんな私をありのままに受け入れてくれた家族には、本当に感謝している」（同上、59頁）と結んでいる。

筆者は、親（母）子関係や生育環境は人格形成の重要な鍵を握っている、と考えている。夏莉はそうした言葉を用いてはいないが、自身を振り返って、幼児期の伯母との「愛着形成」を第一の「回復の基盤」、上述の在日韓国人の女性を第二の「回復の基盤」として挙げている。

伯母は、既に述べたように夏莉を2歳すぎに預かり、5歳まで実子と同じように愛情深く育ててくれた。夏莉自身も、「伯母は私を限りなく慈しんでくれた」と回想している。

回復の基盤としては伯母と在日韓国人の女性以外に、夫や子どもとの家庭生活も挙がるだろう。さらに、夏莉は、大きな転機として、中村ユキの『わが家の母はビョーキです』というマンガとの出会い（中村、2008）を挙げ、精神科医として表面上は社会的地位があり、過去の凄惨な記憶も封印できているかのよ

うに見えるが、真の回復には至っていなかった、と回想している。

中村に「6時間近く話を聞いてもらったことが治療となり、数十年間封印していた何かが勢いよく流れ出すかのように、私の「語り部」としての活動が始まった。全国の家族会や当事者の会で、生い立ちを語った。そして語るうちに、私の家族への見方が少しずつ変化していった。人に語るには、過去が清算できていないと語れない。この数年間の何十回という講演活動は、私の家族史を清算する作業ともなった」（同上、61頁）と述べている。

親（母）子関係や生育環境について

筆者が担当する心理学の授業では、人格形成における初期経験の大切さ、とりわけ母子関係や生育環境を強調している。そして、血縁関係が全く無い人物との愛着形成の一例として井上靖を紹介している。また、心の病の発症に遺伝の影響はあるものの、遺伝だけで決まるわけではない。むしろ、親（母）子関係や生育環境が人格形成の重要な鍵を握っていることも強調している。しかし、それを具体的に示すのは容易ではない。特に、心の病を発症した当事者の病状やそれに伴う特徴などは例示できるが、彼らと暮らす子どもの実態や成人後にその子どもがどうなっているのか、などのデータはほとんど無い。しかし、その点について夏莉が詳細な記述を行っている、といえよう。

これまで見たように、井上靖と夏莉郁子それぞれの親子関係や生育環境は、常識的な範疇からは大いに逸脱しているといえよう。筆者は前者のそれを「暖かくほのぼのとした」と、後者を「暗澹とした」と形容した。そして、井上靖がそれらを概ね肯定しているのに対し、夏莉はそうではない。夏莉自身が、「母と過ごした異常な時間が忘れることができないまま残っている」と述べ、筆者にとっても「毎日同じおかげが8年間続いた。また、何年も掃除せず万年床にネズミが糞をするような生活」などの生育環境は極めて衝撃的であった。

親子関係もさることながら、二人の生育環境の違いに着目すると、夏莉のそれが青春期中において異常な事態を招く大きな要因であったといつてあながち間違いではなからう。

井上靖が青年期に金沢で柔道に明け暮れる禁欲的な生活を送り、やはりそうした過ごし方を肯定しているのに対し、夏莉は青年期に孤立、大量飲酒や喫煙、過

食・拒食、リストカット、さらに既婚男性との恋愛などのいわゆる逸脱行動や心の病に至っている。さらに、夏莉はそうした状態から回復したとはいえ、「毎日同じ物を食べている」とあるように幼少期の生育環境による影響を現在に至っても色濃く残している、といえよう。

すなわち、ストレス脆弱性モデルに、「脆弱性自体が生物学的のみに規定されるのではなく、在胎中から思春期までの環境との能動的相互作用により脆弱性が形成される」とあるように夏莉の場合もその親子関係や生育環境により脆弱性が形成され、ものの考え方や、感じ方に歪みが生じ、その痕跡が同じ物を食べ続ける行為などに残っていると考えられる。

こうした親子関係や生育環境の影響は夏莉ばかりでなく、井上靖にも見て取れる。井上もおかのお婆さんと生活する中で、両親とは似ても似つかぬ自分を自分の内に見出すとして浪費癖と射幸心を、また、物事に諦めがよく、かなり大きな失敗にもさして神経を使わぬ楽天的なところを挙げている。本論文では井上靖と夏莉を取り上げて論じているが、こうした親子関係や生育環境には筆者を含めて誰もが影響されるのである。それは当然のことであるが、問題なのはその人が青年期やその後の人生で、ほどほどの人間関係や社会生活を送れるのか否か、なのである。夏莉に見るように逸脱行動や心の病は可能であればそれらを回避することが望ましいことは言うまでも無い。

しかし、現実には1998～99年頃を分岐点として若者の精神保健上に負の影響を与える要因が存在し、それは若者ばかりではなく老若男女に当てはまるのはこれまで見てきた通りである。それらの中には労働環境によるものも大きい、親子関係や生育環境によるものも極めて大きいことが実感される。

学生相談でも適応障害、リストカット、うつ、不安障害などの学生に対応するが、親子関係や生育環境の影響や、それによると推測されるものの考え方や、感じ方の歪み、あるいは弱さを感じる。例えば、過去にこだわりすぎる、自己肯定感が低い、情緒が不安定、悲しげな表情などである。

井上靖と夏莉の資料を比べると、対応の要点が浮かび上がってくる。最も大切なことは、親子関係である。血縁関係が全く無い人物であろうと、その人物との間に適切な愛着が形成されれば、その後の人生をその人らしく生きていく基礎を築くことができることを井上の例は示している。夏莉も母親に代わる幼児期の

伯母との「愛着形成」を第一の「回復の基盤」として挙げている。

そして、生育環境における友人関係を含む人間関係も挙げたい。井上靖はその好例であり、夏莉が転落の人生を回避できたのも、初めての親友である在日韓国人の女性との出会いと夏莉を気遣う彼女の言葉であった。この人間関係に関連して、精神科医の齊藤環も自己を肯定できることの大切さを強調し、「……自分を肯定する一番の拠り所は人間関係です。だから、孤立してしまっている人は自己肯定が難しい。孤立は苦しいけれども、孤立しているのは自分のせいだとみんな思い込んでいますから。だから自分を肯定するところから出発できれば、結構自己治療能力を発動できるのです……」と述べ、さらに「……ある種の人にとって病むのは必然ですけれども、治るのは偶然なのです。病んでゆく過程というのは、これはもうどんどん進むしかないというときがあるのです。そこから回復する可能性はあるけれども、それはまさに人薬に頼らざるを得ない。そういう治療的な出会いを起こすのは、本当に偶然に頼るしかないんです……」と、「人薬」という言葉を用いて「いい人との出会い」を祈ると述べている(想田, 2009年235～236頁)。この「人薬」という言葉は、やはり精神科医の山本昌知が最初に用いたが、山本も薬物療法の有効性を認めつつも「……(統合失調症の)解体期が過ぎて、自分のことについて、本当に感じたり考えたりできる状態になったときに、今度はどうしても、薬はある程度利用するにしてもですね、人間のぬくもりというか人間的な触れ合いというものが豊にあることが必要なんじゃないかなと。それが実際には難しいんですわ。……逆に出会いやら人間関係が形成できた人は、いい方向に行くわけですわ……」と述べている(同, 158頁)。心の病の現場で豊富な臨床経験を重ねた人の傾聴に値する発言である。そして、夏莉と在日韓国人の女性との出会いは、齊藤や山本の言うように、まさに偶然の出会いであり、しかもそれは治療的会いだともいえよう。

本論文では、若者の精神保健の動向とその対応を心理的側面から考察するために、井上靖と夏莉郁子の資料を取り上げて人格形成の観点からそれぞれの親子関係や生育環境を検討した。これらの資料は追跡的なデータともいえ、極めて貴重である。とりわけ夏莉の資料にはそれが当てはまるだろう。今後は、追跡的データ以外の資料をも含めて心理的側面からの対応を追究していきたい。

注

* 愛知県立大学教育福祉学部教授

文献

- 1) 中藤淳：2004 愛知県立大学における精神保健の現状と課題(2)—健康調査カード (UPI) による新入生のデータ—, 愛知県立大学文学部論集、第53号、pp. 129-148.
- 2) 中藤淳：2005 愛知県立大学における精神保健の現状と課題(3)—健康調査カード (UPI) による在学生のデータ—, 愛知県立大学文学部論集、第54号、pp. 77-98.
- 3) 中藤淳：2011 現代の若者の精神保健の動向(1)—精神保健上の変化について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第60号、pp. 35-46.
- 4) 中藤淳：2012 現代の若者の精神保健の動向(2)—精神保健上の変化の要因について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第61号、pp. 91-100.
- 5) 中藤淳：2013 現代の若者の精神保健の動向(3)—収入や雇用、就職との関係について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第62号、pp. 99-107.
- 6) 中藤淳：2014 現代の若者の精神保健の動向(4)—結婚との関係について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第63号、pp. 51-60.
- 7) 中藤淳：2015 現代の若者の精神保健の動向(5)—進学との関係について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第64号、pp. 87-99.
- 8) 中藤淳：2016 現代の若者の精神保健の動向(6)—これまでの結果から—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第65号、pp. 23-35.
- 9) 中藤淳：2017 若者の精神保健の動向とその対応(1)—労働環境について—, 愛知県立大学教育福祉学部論集、第66号、pp. 75-84.
- 10) 内閣府 国民生活に関する世論調査 2018年8月
- 11) 働き方改革を進めるための改革プラン (働き方改革実行計画 (平成29年3月28日働き方改革実現会議決定))
- 12) 朝日新聞 2018年6月2日
- 13) 朝日新聞 2018年6月16日
- 14) 厚生労働省 みんなのメンタルヘルス <https://www.mhlw.go.jp/kokoro/index.html> (2018年12月13日)
- 15) 精神保健福祉用語辞典, 2004年 中央法規出版
- 16) 井上靖：1976 幼き日のこと・青春放浪, 新潮文庫
- 17) 夏苺郁子：2016 回復は、和解のプロセスから, 子ども虐待とネグレクト, 第18巻第1号、pp. 58-63.
- 18) 夏苺郁子：2011 人が回復する、ということについて—著者と中村ユキさんのレジリエンスの獲得を通しての検討, 精神神経学雑誌, 113(9)：845-852.
- 19) 夏苺郁子：2012 心病む母が遺してくれたもの, 日本評論社
- 20) 夏苺郁子：2014 もうひとつの「心病む母が遺してくれたもの」, 日本評論社
- 21) 想田和弘：2009 精神病とモザイク, 中央法規